ＩＳ インフィニット・ストラトス ～未来の翼～

八神刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス　～未来の翼～

【Ｎコード】
Ｎ２８２５Ｒ

【作者名】
八神刹那

【あらすじ】
柳瀬大護が帰還して２０年後。新たな世代の物語り。新たな出会い、想い、力が再び交差する。

プロローグ（前書き）

これは『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼き翼の天使～』の２０年後の物語りです

ＩＳの主人公は一夏ではありませんので読む方、ご了承ください。

ちゃんとなのは達も出演します！

プロローグ

天界との戦争が集結してから１５年後。

世界最強のチーム“十三隊”は戦争が集結してから姿を消した。

彼らその功績から『七雄』と呼ばれその存在を知らぬ者はいなくなった。

彼らはその舞台から姿を消した。

ある者は自分の夢を叶え

ある者は過去の自分達のような子たちを引き取り育て

ある者は自分の好きなコトをし

ある者は己の大切な人を護る職に就き

ある者は再び旅をしたり

彼らは各々の道を歩き始めた。

この物語りは新たな世代の物語り。

第1話　ＩＳ学園

翔Ｓｉｄｅ

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け。それ自体はいい。
だが、問題はこのクラスに男がオレ1人という点だ。

（これは想像以上にキツイ・・・）

助けを求め視線を送るが薄情な幼なじみこと篠ノ之箒は窓の外に顔を逸らす。

（それが6年ぶりに再開した幼なじみに対する態度か。オレって嫌われてるのか）

「・・・・・・くん。柳瀬　翔くんっ」

「は、はいっ！？」

いきなり名前を呼ばれ声が裏返ってしまった。案の定、クスクスと笑い声が聞こえる。

前には副担任の山田真耶先生がいた。

「あ、あのね。大声出しちゃって。怒ってるかな？あのね。自己紹介、席順でやってて今、柳瀬くんなんだよね。自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

山田先生がペコペコ頭を下げて謝っている。

「そんなに謝らなくても、っていうか自己紹介しますから」

そう言って立ち上がる。

「えっと、柳瀬　翔です。よろしくお願いします」

言うとみんなのキランと光っている。

（いかん、このままじゃ暗い奴のレッテルを張られてしまう）

深呼吸をし

「以上です！」

がたたたっ！思わずずっこける女子が数名。

「あのーっ。ダメでした？」

パアンッ！いきなり頭を叩かれた。威力、角度、速度。よく知っている人物が頭をよぎる。

振り向くと黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、ビーストクォーター特有の猫耳、赤桃色の髪に狼のような鋭い吊り目。

「げっ！関羽！？」

パアンッ！また叩かれた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「柳瀬先生。会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまない」

母さんがオレの担任？職業不詳で週一くらいでしか家に帰って来ないオレの実の母親が。

「諸君。私が担任の柳瀬フェルトだ。君達新人を1年間で使いものにするのが仕事だ」

間違いない。この耳に右耳の2つのピアス。これはオレの母・柳瀬フェルト。

「キャーーーーー！フェルト様！本物のフェルト様よ！」

「ずっとファンでした！」

黄色声援が響いた。

「毎年、よくこれだけの馬鹿者が集まる。感心させられる。それともなにか。私のクラスにだけ集中させているのか？」

母さんはうっとうしそうに騒ぐ女子を見る。だが

「キャーーーーー！お姉様！もっと叱って！罵って！」

女子達はオレの想像を超えていた。でも、母さんってもう４０過ぎてるよな？見た目はガチで２４、５歳だけど

「で？挨拶もろくにできないのかお前は？」

「いや、母さん、オレはーー」

パアンッ！本日3度目。

「学校では柳瀬先生だ」

「・・・・・・はい、柳瀬先生」

「え？柳瀬くんって、あのフェルト様の息子？」

「それじゃあ、世界で唯一“ＩＳ”を使える男性って、それが関係してくるんじゃ」

ばれた。まあ、あのやり取りで関係はばれるよな

「静かに！諸君にはこれからＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ」

「はいっ！」

ＩＳ。正式名称“インフィニット・ストラトス”。１０年前に開発されたマルチフォームスーツ。最初は宇宙での活動を想定していたが停滞していて、今はもっぱら競技種目になった。

で、オレの実の母・柳瀬フェルトは第一世代型ＩＳの元日本国代表。公式戦無敗の記録で『無敗の王者』と呼ばれていたが3年前に引退。

さらに付け加えるならＩＳは女性にしか使えない。

これがオレの新しい世界の始まりだった。

第2話　決闘

翔Ｓｉｄｅ。

「あー・・・・・・」

参った。これはマジで。

１時間目の授業が終わって休み時間。この教室内に異様な空気が流れている。

この学園はオレ以外全員女子。しかも、『世界で唯一ＩＳを使える男』と言うのは世界的なニュースだったから在校生から職員までみんなオレのコトを知っている。しかも、元日本国内代表で、憧れの柳瀬フェルトの息子というプロフィールつき・・・・・。

で、廊下にはなぜか他のクラスの女子の他に2、3年生までいる。まるで珍獣だ。

「ちょっといいか？」

「え？箒？」

目の前にいたのは、６年ぶりの再会になる幼なじみだった。

篠ノ之箒。オレが昔通っていた剣道道場の子。髪型は今も昔も変わらずポニーテール。

「ついてこい」

そう言われオレ達は屋上へ行くことになった。

◇◇◇

「久しぶりに会ったんだ。なにか話すコトがあるんだろ？」

「あ、え・・・・・」

「ああそうだ。去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし・・・・」

「な、なんで新聞なんか見てるんだ」

何を言ってるんだ？新聞くらい好きに読ませろよ。あと口調も変わってないな、男っぽいっていうかサムライって感じだな。

「あー、あと」

「なんだ」

「久しぶり。６年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」

「え・・・・？」

「ほら髪型一緒だし」

すると、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

「よ、よくも覚えているものだな・・・・」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」

ギロリ。睨まれた。なんで？

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなった。

「オレ達も戻ろうぜ」

「わかっている」

すたすたと歩き出す箒。この幼なじみはオレを待つ気はないらしい。

６年の歳月はこうも人を変えるのか。

いや、箒は昔からこんな感じだ。

◇◇◇

「であるからして、ＩＳの――――――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。オレの前にはどっかりと積まれた教科書５冊。

（このアクティブなんたらとか広域うんたらとかどういう意味なんだ？これ全部覚えないといけないのか？）

ＩＳの授業にオレは全くついて行けなかった。

「柳瀬くん、なにかわからないところがありますか？」

山田先生が聞いてきた。

「わからないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへんと言いたそうに胸を張る山田先生。

「先生」

「はい、柳瀬くん！」

「ほとんど全部わかりません」

素直に言った。

「え？ぜ、全部、ですか？」

顔が困り度１００％で引き攣った。

「今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

シーン・・・・・・。

なんで誰も手を挙げない。いいのか？みんな。あとから後悔するぞ。

「・・・・柳瀬、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか」

頭にあの電話帳みたいな参考書が浮かぶ。

「そうだ」

「捨ててしまいました」

素直に答えた。

パアンッ！今日で何度目？

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから1週間以内に覚えろ。いいな」

「いや、あの分厚さはちょっと・・・・・」

「やれと言っている」

ギロッ。睨む目は悪魔のようだ。

「・・・・・わかりました」

◇◇◇
放課後。
学園の僚の自室の前。急遽オレの部屋が決まったらしい。母さんから着替えと携帯の充電器しかもらってないけど・・・・・。父さんはしばらくどっか行ってるらしいし・・・・・。
「１０２５室。ここか」
ドアを開け部屋に入る。
「おお！」
部屋はかなり広い。そんじょそこらのビジネスホテルよりはいい。
「誰かいるのか？」
突然シャワー室のほうから声がした。この声どっかで・・・
「ああ、同室になった者か。これから1年よろしく頼むぞ」
すごくいやな予感がする・・・・・・。
「こんな格好ですまない。私は篠ノ之・・・・」
「箒・・・・・・」
シャワー室から出て来たのは今日再会した幼なじみだった。しかもシャワーを使っていたからだろう、箒の体はバスタオル1枚を巻いただけの姿だった。

「し、し、しょう・・・？」

「お、おう・・・・」

「み、見るなーー！！」

箒は壁にかけてあった木刀をとり一気に間合いを詰めて来る。オレはドアの向こうへ、間一髪の脱出。

「ふう・・・」

ズカンッ！

顔の横2ミリを木刀が。木刀がドアが戻る。背中に殺気を感じる。

ズドンッ！

間一髪で避ける。

「殺す気か！今の避けてなきゃ死んでたぞ！」

「あー。柳瀬くんだー」

「ここって柳瀬くんの部屋なんだー」

騒ぎを聞きつけた女子がぞろぞろとやって来る。しかもラフなルームウェアでそのため男のオレには刺激がキツイ。

「箒、箒さん。部屋に入れて下さい。まずいコトが起こってるんで。

お願いします。どうかこの通り」

頭の上で合掌する。

「入れ・・・・・・」

ドアを開けた箒は剣道着を纏っていた。

父さんはどこに行ったんだ？定食屋の仕事ほったらかしにして。家は定食屋をやっているそれなりに有名な店らしい。母さんがＩＳのパイロットになるまでたった２人で営んでいた『定食屋　ヤナセ』。定食屋って言っても結構なメニューがあった。しかもどっから採って来たかわからない高級ワニ肉ガララワニやら高級フルーツ“ボムボムの実”などが安価な値段で食えるらしい。

父さんの名は柳瀬大護。世界を救った七雄の一人らしい。それがなんで定食屋なんかやってるかは未だ不明。でもあの人達は栄職に就かなかったのはなんでなんだ？

◇◇◇

翌日。

やっぱり授業はわからん。昨日予習したのに・・・・。

今は休み時間。昨日と状況は同じ。

「ちょっと、よろしくて？」

「ふぇ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

正直、この手合いは苦手だ。ＩＳを使える。それが国家の軍事力。だから操縦者は偉い。しかもＩＳを使えるのは女性だけ。

「悪いな。オレ、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試首席のこのわたくしを！？」

「質問いいか？」

「ふん、下々のものの要求に応えるのも貴族の務め。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたたっ。クラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ・・・・・・」

「あ？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。常識」

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのコトですわ。単語から想像したらわかるでしょう」

「そう言わればそうだ」

「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくするだけでも奇跡・・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そっか。それはラッキーだ」

「馬鹿にしてますの？」

「そっちが言ったんじゃないか」

「大体、ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたが、期待ハズレですわ」

「オレに何かを期待されても困るんだが」

「わたくしは優秀ですから、わからないコトがあればまあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。なにせわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

スゲー高慢な態度・・・・あれ？

「オレも倒したぞ。教官」

「は？」

「倒したっていうか、自滅したというか」

「わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「あなたも教官を倒したって言うの！？」

「落ち着けよ」

「これが落ち着いて――――」

キーンコーンカーンコーン

福音が聞こえた。

「話しはまた後で！！」

なんか嫌な予感がバリバリする・・・・。

3時間目の授業は山田先生でなく母さんだ。

「この時間は各種装備の特性を・・・・。ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。クラス代表者はまあ言葉通りだ。クラス長と思ってくれて構わない」

まっ、オレには関係ないか・・・・

「はいっ。柳瀬くんを推薦します！」

え？

「私もそれがいいと思います！」

オレ？

「候補者は柳瀬翔。他にはいないか？自薦他薦は問わんぞ。いないなら夢投票当選だぞ」

「ちょっと待て！オレは」

まだ知識も何にもないのにクラス長なんて無理だ！

「柳瀬邪魔だ。推薦された者に拒否権はない」

そんな横暴な！？

「納得できませんわ！そのような選出は認められません！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのようなな屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか！？」

バンッと机を叩きセシリアが立った。そうだもっと言ってやれ・・・・ってあれ？

「いいですか！？クラス代表は実力がトップがなるべき！そしてそれはわたくしですわ！大体文化としても後進的な国で暮らさなくてはならない自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」

カチン

「イギリスだってたいしたお国自慢ないだろ？世界一マズイ料理で何年覇者だよ」

言っちまった・・・・。まあいいか

「あっ、あっ、あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

馬鹿にしたのはそっちが先だろ？

「決闘ですわ！！！」

「おもしれぇ。四の五の言うよりわかりやすい」

やるっきゃないな。

「まとまったな。勝負は1週間後。第3アリーナで行う。柳瀬とオルコットはそれまでに準備しておくように」

母さんがそう言った。これがオレの戦いの始まりだった。

第3話　届け物

「さてと。さっさと届け物を届けるか」

帽子を深く被り直した見た目青年は歩き出した。
その周りは総勢２４人の不良グループが倒れていた。

「あ、悪魔・・・・・・」

「否定はしないよ。俺達は悪人だから」

彼は二本の刀を腰に差し直す。それからおいてあるなにかが入っている布を取り歩き出した。

ＩＳ学園。
翔Ｓｉｄｅ。

２時間目が終わり3時間目。今日もグロッキー。

「柳瀬。お前のＩＳだが、来るのに時間が掛かるそうだ」

「へ？」

「予備機がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ」

母さんの説明にちんぷんかんぷんなオレ。でも、専用機持ちって政府から援助が出るってコト？

「本来ならＩＳ専用機は国家、企業あるいは元老院認定の正規ギルドに所属する者にしか与えられない。が、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されるコトになった」

簡単に説明すると。
ＩＳは世界で４６７機しか存在しない。
コアは篠の実姉の篠ノ之束博士しか作れない。
そして、オレは特別待遇の実験体。

「武器は特別に用意した。今日届くらしい」

なんで武器だけ？なんか嫌な予感・・・・。

「それは聞いて安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようなんて思っていなかったでしょうけど」

今授業中だよセシリアさん。

「勝負は見えていますけど？さすがにフェアじゃありませんものね」

「なんで？」

「ご存じないのね。いいですわ。庶民のあなたに教えて差し上げましょう。わたくし、セシリア・オルコットはイギリス代表候補生。つまり現時点で専用機を持っておりますの。これは人類６０億のなかでエリート中のエリートなのですわ」

高らかに言うセシリア。母さんはずっとドアを見ている。

「さっさと入って来たらどうだ？」

母さんが言った。ドアが開き1人の男が入って来た。男は帽子を深く被っていて顔がよく見えない。

「やっぱり気づいてた？」

「当然だ。お前ぐらいしかいないだろ？」

「そうだね～」

どっかで、いや。月一で聞いたコトがある声。

「久しぶりだね～。翔くん！」

男が帽子を取る。茶髪に人懐っこい顔。頬にバッテン傷。

「憐さん！？」

「ご明答！千樹　憐が翔くんに届け物を持って来たよ！」

父さんの親友で七雄の一人　千樹　憐。その人だ。

「千樹憐ってあの？」

「世界救った七雄の？」

クラスがざわつく。

「「「キャアーーーーーーーーーー！！」」」

「憐様よーー！！」

母さんが頭を押さえる。

「いやぁ～すごいねぇ」

原因はアンタだよ！

「で、届け物っていうのは」

「ハイこれ」

と言って憐さんは布に包まれた１６０ｃｍある棒のような物を見せる。

「これは？」

「ＩＳで試合やるんでしょ？君の父から贈り物。銘は王刀“叢雲牙二式”。名刀中の名刀だよ」

言われて気になって布を開ける。

「これ刀！？」

「そうだよ」

入っていたのは刀には思えないほど大きな刀。いわゆる大刀が入っ

ていた。

「叢雲牙はマナとＩＳのハイブリットタイプの武器。俺達７人の刀と基本は同じ。あと、特殊能力があるんだって。それは自分で何とかしてね。んじゃ！」

と言って憐さんは窓から飛び降りた。

オレは再度叢雲牙を見る。刀に詳しくないオレでもわかる。この刀がかなりすごいのは。ってこれどーすんの？

４時間目が終わり昼休み。オレは箒と一緒に食堂へ来た。一緒にって言ってもオレが半ば強引に連れて来たんだが。

とりあえずオレは憐さんから届けてもらった刀を背負っている。わけでかなり目立っている。

「日替わり定食２つ」

オレが注文すると

「はーい。日替わり２つ追加！」

聞き覚えのある声。前を見ると

「翔くんだ」

憐さんがいた。

「何やってんですか！？」

「俺ここで働くコトになったんだ～。ハイ。定食２つね。ねぇねぇ翔くん。手ぇ繋いでいる子は彼女？」

「え？」

そうだった。オレ箒と手繋いでいたんだっけ

「さてと俺も昼にしようっと」

と言って憐さんも自分のトレイを持ってオレ達を席に案内する。

「あっ！翔じゃん！」

「憐、翔くん」

「久しぶり」

「・・・・・・」

とんでもない面子がいた。上から橘　麗奈さん。元母さんと同じ国家代表。第一回モンド・グロッソ２位。そして、七雄のリーダー、橘　嵐の妻。

千樹　マリーさん。元国家代表。第一回モンド・グロッソ３位。憐の妻。

邦枝　滄さん。元国家代表。モンド・グロッソ４位。

そして、母さん。

「なーに固まってんの！？」
「早く食べないと冷めちゃうよ」
「座ったら？空いてるから」
おそらく世界最強の女性。実年齢４０歳越えなのに見た目２０歳後半にしか見えない。
「今失礼なコト考えてた？」
マリーさんが鋭いコトを言う。
「べつに歳のコトは良いんだよ。この４人もうおばさん世代なんだし」
ギロッ！×４
「ゴメンナサイ」
憐さんに怖い一睨み。英雄が謝る。オレと箒も椅子に座って定食を食べはじめる。
「そーいや翔って代表候補生と模擬戦するんでしょ？大丈夫なの？」
「たぶん大丈夫」
「まっ！頑張ってね」
「そー言えば他の皆さんは？」

「そのうち会えるよ。ちなみに君の父の大護は今オスティア」
麗奈さんが言う。
「なんで？」
「さあ？たぶん魔獣退治じゃない？」

そんなこんなで放課後。オレは箒から剣道の試合していた。しかもオレの一本負け。
「どういうことだ！」
「どういうことって言われても」
「どうしてここまで弱くなっている！」
「受験勉強してたからかな？」
「中学では何部に所属していた？」
「帰宅部。３年連続皆勤賞だ」
実際は父さんがちょっとやらかして店の手伝いしてたんだけどね。
「鍛え直す！今日から1日3時間、私が稽古を付けてやる！」

「え？それよりＩＳのコトは・・・・・・」

「それ以前の問題だ！それとあの刀がＩＳの武器なら好都合だうろ」

それはそうだけど・・・・・・。てか叢雲牙って普通の刀じゃないよな。

箒はオレに軽蔑の眼差しで更衣室に行ってしまった。

「じゃあ。トレーニングでもしようか」

見ていた剣道部顧問の滄さんが言ってきた。

（負けられない。こんなところで・・・・・・！）

箒Ｓｉｄｅ。

（少し言い過ぎただろうか・・・・・・）

いや！あれくらいでいいのだ！明らかに1年以上剣を握っていない・・・・・。でも、これで翔と2人きりで・・・・・。

鏡にちょっとだけ微笑んだ顔を見て私はハッとする。

「いや！そのようなコトは考えていないぞ！私は同門の不出来を嘆いているだけだ！」

と言って拳を強く握る。

「故に正当だ！」

???Ｓｉｄｅ。
この世界発祥の地。王都オスティア。ここで１人の男と影の大群の戦いがあった。結果は男の圧勝。

「フゥーー。まさかまた現れるとはな・・・・・・」

（影の密度からしてオルトロス当たりか・・・・・・。天兵の残党と亡霊か、もう少しかかるな・・・・・）

彼は背中に大刀を背負い左腰に鍔のない刀を差している。右目に縦の傷。彼の嫌な予感は当たる。

七雄最強と謳われた柳瀬　大護は暗くなった空を眺めていた。

辺りは火があり彼の好きな星空は見えなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2825r/

ＩＳ インフィニット・ストラトス ～未来の翼～

2011年3月10日21時28分発行